

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 8 号

平成14年12月20日

ビリー・グラハム「きょうのみことば」より（4）

4月12日

ひとりの忠実な証し人は、千人の沈黙を守っている信仰告白者に匹敵する。スコットランドの有名な若い説教者、トム・アランは、ひとりの黒人の兵士が、「君もそこにいたのか、主が十字架につくとき……」と歌っている間に、キリストのみもとに行くことができたのである。彼は、次のように言っている。「私に自分の邪悪な生活の罪を悟らせ、私をキリストに向わせたのは、その歌でも、その声でもなかった。そうではなくて、その兵士が歌っている霊的な姿勢 彼の態度、彼の表現の誠実さ であった」と。私たちの信仰は、それを表明することによって、成長する。もし私たちが自分たちの信仰を保ち続けたいと思うなら、それを他の人々に分かち与えねばならない。 私たちは、あかしをしなければならぬのである。

4月26日

自然界には、神の存在を物語っている言葉がある。それは、秩序、美、完全、知性などである。しばらく前、ひとりの科学者が、「私は、宇宙の荘厳な秩序とそれが不変の法則に従っていることを真剣に考えるとき、神を信じないではいけないのです」と、私に語った。彼は、神が自然界をとおして語っておられることを知るようになっていた。神は、次のものをとおして語っておられた。すなわち、四季の确实さと規則正しさをとおして、太陽、月、星の運行の正確さをとおして、夜と昼の規則正しい到来をとおして、人間による酸素の消費と植物によるその生産の間のバランスをとおして、そして、命の奇跡を絶えず新しく例証している生れたばかりの赤ん坊の産声（うぶごえ）をとおして、語っておられるのである。

6月13日

ウォルター・ナイトは、最近キリストを受け入れたばかりの小さな男の子の話をしている。「お父さん、僕は聖霊を見たことがないのに、どうして聖霊を信じることができるの？」と、ジムは尋ねた。「それを、お前に、見せてあげよう」と、電気技師の父は答えた。その後、ジムは、父親に連れられて発電所へ行き、そこで、発電機を見た。「ここから電力が出て、私たちのストーブを熱したり、照明に用いられたりしているのだ。私たちは電力を見ることはできない。しかし、それは、その機械の中にあり、送電線の中にあるのだ」と父は言った。「僕は電気を信じているよ」と、ジムは言った。「もちろんそうだろう。しかし、おまえは、それが見えるからそれを信じているのではない。おまえがそれを信じているのは、その働きを見ているからだ。同様に、おまえが聖霊を信じることができるのは、人々がキリストに明け渡し、キリストの御力をいただいた時に、聖霊が彼らの生活に対してなされるみわざを見ることができるからなのだ」と、父は語ったのである。

6月15日

私たちは、自分たちの時間の管理人である。神は、私たちひとりびとりに、時間と呼ばれる小さな「永遠の切れはし」を与えておられる。これらの黄金の機会は、私たちの益のため、そして神の栄光のために、私たちに与えられているのである。もし私たちが、賢明に用いるならば、それらは、神の全能の御手によって、永遠という織物の中に、織り込まれていく。ヘンリー・ソローは、「あなたは、永遠を損なうことなしに、時間をつぶすことはできない」と警告した。「永遠についてのビジョンを持っていない者は、時を支配する力を全く持っていない」とカーライルは言った。「たった一度の人生、それはすぐに、過ぎ去ってしまう。キリストのためになされたことのみが、永続する」これは、自分の時間のよい管理人となりたいと願っているすべての人が抱いている気持である。私たちは、時間という資本の小さな部分を、託されている。もし私たちがそれを賢明に投資するなら、それは永遠にわたる配当をもたらすことであろう。

6月18日

聖書は、誤解の余地もなく、私達が死別に対して勝利を得ることができていることを教えている。詩篇の記者は、「夕暮れには涙が宿っても、朝明けには、喜びの叫びがある」と言った。自己憐憫が、永続的な慰めをもたらすことは無い。事實は、こうなのである。それは、ただ、あなたのみじめさを増すだけなのである。そして、ひっきりなしに続く悲しみは、それ自体、あなたにほとんど慰めを与えはしないだろう。なぜなら悲しみは悲しみを産み出すからである。悲しみ、あるいは哀悼は、それがクリスチャンらしく耐え忍ばれるとき、その中に本来備わった慰めをもっている。「悲しむものは幸いです。その人は慰められるからです」と聖書は言う。悲嘆の中には慰めがある。なぜなら、私たちは、キリストが私たちと共にいますことを、知っているからからです。彼は、「見よ。私は、世の終わりまで、いつも、あなた方と共にいます」と言われた。苦難は、もし、私たちが、ひとりでそれを耐え忍ばなくてもよければ、耐えることができる。そして、キリストのご臨在があわれみ深くあればあるほど、苦難の鋭さは、少ないのである。

6月22日

H・G・ウェルズは、「キリストは、歴史上、最もユニークなおかたである。誰も、そのナザレの無一文の教師に、第一のそして最も重要な地位を与えずに、人類の歴史を書くことはできない」と書いた。イエスと呼ばれるお方は、33年間、この地上において、生活された。彼が生家から100マイル以上はなれた所へ行かれたことは、決してなかったのである。しかし、それにもかかわらず、チャールズ・ラムの、「歴史上のすべての著名人が集まっているとして、そこへシェークスピアが入ってくるならば、彼らは敬意を表して立ち上がるであろう。しかし、もしイエス・キリストが入って来られるならば、彼らは、平伏して礼拝するであろう」ということばは、正しかったのである。

6月28日

なぜ、クリスチャンは、苦しむのだろうか。安心するがよい。クリスチャンが苦しむのには、理由があるからである。なぜ神の民が苦しむのか、その一つの理由は、聖書によれば、それが、訓練と懲らしめと人間形成の過程であるからである。聖書から、私たちは、＜苦難による懲らしめは、私たちの全き成長の過程における一段階である＞ということ学ぶ。苦難はまた、精錬ときよめ的手段となることがある。多くの人生が、これまで以上に美しく有用なものとなって、苦難の炉から出てきているのである。

6月30日

祈りは、相互的な会話である。それは、私たちが神に語り、そして、神が私たちに語られることなのである。クリスチャンとして、あなたは、祈りを聞き、祈りに答えてくださる天の父をもっている。イエスは、「あなたが信じて祈り求めるものなら、何でも与えられます」と言われた。教会にとって、また神の国にとって、価値ある生涯を送った男女はひとり残らず、祈りの人であった。忙しすぎて祈るひまがないなどと言うことは、ありえないのである。祈らないクリスチャンは、力のないクリスチャンである。イエス・キリストは、多くの時間を祈りに費やされた。時として彼は、夜、山上で、ただひとり父なる神と交わり、過ぎされたこともあった。もし彼が祈りの必要を感じておられたとすれば、まして私たちは、どんなに祈りを必要としていることであろう！

7月15日

クリスチャンであることの特別大きな祝福の一つは、墓を超えて神の未来の栄光にまで広がっている偉大な希望である。ひとりの小さな女の子が、夜のとばりが下りようとしていたとき、共同墓地の方に向って、走って行った。途中で彼女は、ある友人に出会ったが、その友人は、彼女に、夜、墓を通り抜けるのは、怖くないかと、尋ねた。「怖くないわよ。私の家（ホーム）がちょうど向こう側にあるのですもの！」と、彼女は答えた。私たちクリスチャンは、死の夜を恐れてはいない。なぜなら、私たちの天のホームが、「ちょうど向こう側にある」からである。キリストの復活は、死別という真夜中を、再会という日の出に変えたのである。それは、失望と言う真夜中を、喜びと言う日の出に変えたのである。きょうよみがえられたキリストを信じる信仰と確信は、あなたの恐れを希望に、あなたの失望を喜びに、変えることができるのである。

7月17日

聖書は、私たちに、神はどのような人をも誘惑することはなさないと告げている。誘惑は、常に、悪魔から来る。神は、私たちをテストし、私たちが誘惑を耐え忍ぶのを許容しておられる。しかし悪魔から来る誘惑を、私たちはどのように克服すればよいのであろうか。かつてある小さな女の子が、彼女の方法を語ったことがある。彼女は言った。「悪魔が戸口に来てノックしているとき、私は、それに応答しません。私は、イエス様に戸口に出ていただくのです」と。そして、これこそまさに、それを処理する方法である。イエス様に戸口に出ていただくが良い。

ビリー・グラハム先生の伝道集会の思い出

山口 周三

ビリー・グラハム先生の説教をはじめて聞いたときの思い出を、エンカウンターの第6号に書きましたが、もう一度少し詳しく書いてみたいと思います。

ビリー・グラハム先生のクルーセード(大伝道集会。クルーセードとは、もともとは十字軍の意味)が東京の後樂園球場で開かれたのは、1980年の10月22日(水)から26日(日)までの5日間でした。私は、3日目の10月24日の朝、通勤途中の地下鉄のつり広告で、大スタジアムの満員の聴衆の写真をバックにして説教しているビリー・グラハム先生の写真入の広告を見て、今後後樂園球場で伝道集会が惹かれていることを知り、何の予備知識もなく、野球場で何万人もの人を集めて行うキリスト教の伝道集会とはどんなものだろうかという全く興味半分でその夜出かけました。

その日は、夕方の6時半から会が始められました。本田弘慈先生の挨拶、会衆の讃美歌、祈祷、ベヴァリー・シェー氏の歌、聖歌隊の合唱などがあった後、ビリー・グラハム先生のメッセージが始まりました。グラウンドの中央に設けられたプラットフォームの上で、10月下旬のやや寒い夜でしたから、先生は白いダスター・コートを着ておられました。

その日のメッセージは、「あなたはよくなりたいたいか」という題で、ヨハネの福音書5章1節から9節までについてでした。

池の水が動くとき一番に入れば病気がいやされると言うベテスダの池のそばで、38年間足なえの人が、イエスに「よくなりたいたいか」と聞かれ、「池に入ろうとしても、他の人が先に入ってしまった、池の中に入れてくれる人がいません」と、イエスに訴えます。イエスが、「起きて床を取り上げて歩きなさい」と言われると、その人はすぐに病気が治って、床を取り上げて歩き出したという病気の人のいやしの話でした。

「イエス様は、この病人を非常な優しさと愛をもってその男を
ご覧になりました。ちょうど今晚、彼があなたを御覧になっている
のと同じように。そして「あなたはよくなりたいたいのか」と、質
問されました。イエス様は今晚その質問を、あなたにも投げかけ
ているのです。「はい、私もイエス様を信じたいと思います」とあ
なたはおっしゃいますか。「彼に従いたたいと思います」とおっしゃ
いますか。

イエスキリストは、私たちの罪、情欲、肉欲を、あなた方は後
に捨てて、たとえ死ぬようなことがあっても、十字架を負って、
私に従ってこなければならぬとおっしゃるのです。今晚ここに
いるひとり残らずの人が、それぞれ個人的な選択をしなければな
りません。あなたの人生は、どちらの道でしょうか。破滅に行き
つく広い大きな道でしょうか。あるいはイエス様と共に天国に行
く、細い狭い道でしょうか。あなたはどちらの道にいますか。あ
なたは今晚よくなりたいたいと本当に願っていますか。

聖書は言っています。「もしあなたの口でイエスを主と告白し、
あなたの心で神はイエスをよみがえらせてくださったと信じるな
ら、あなたは救われる」「しかしこの方を受け入れた人々、すなわ
ちその名を信じた人々には神の子供とされる特権をお与えになっ
た」イエス・キリストはあなた方のために十字架に死んでくださ
いました。神様はあなた方のすべての罪を取って彼の上に負わせ
てください、彼は「神の子羊」となられました。そして、彼を死
人の中からよみがえらせました。父なる神様は、イエス・キリス
トがなされたあがないのみわざのゆえに、あなた方を受け入れて
くださるのです。

イエス様はこの男に「歩きなさい」とおっしゃいました。「まだ
歩いたことがない新しい道を私と共に歩きなさい」と、イエス様
は言われました。それはキリストと共に歩む細い道です。どうか、
毎日聖書を読み、祈りをし、キリストの教会に行ってクリスチャ
ンとして成長する道を歩み始めてください。その瞬間にイエス様

は彼をいやされたのです。そして彼の人生の方向が変えられたのです。それは瞬間に起りました。イエス・キリストは、瞬時にあなたの生涯を変えてくださいます。

神様が提供してくださる罪の許しを、あなたは今晚、受け取らねばなりません。それはあなたがなすべきことです。そして、今晚それをしていただきたいと願っています。」

私は、この説教を聞いて、聖書中心であることにびっくりしました。小西先生からいつも教わっていたロマ書10章9節が引用されたことも驚きでした。私は、今はドームに建て替えられた後楽園球場のベンチ後ろ側の内野スタンドの最上階のあたりに座っていましたが、ビリー・グラハム先生の話にぐいぐい引き込まれていきました。通訳は、古山洋右先生でしたが、ビリー・グラハム先生のメッセージを伝えるにふさわしい実に力強い名通訳でした。

先生のメッセージの後聖歌隊の合唱があり、最後にビリー・グラハム先生のイエス・キリスト受け入れの決断の勧めがありました。

「どうか今晚、イエス・キリストを受け入れる決断をして、グラウンドのプラットフォームの前に下りてきてください。……今あなたの心の中に小さな細い声が、お前も立って行くべきであるとささやいているならば、それは神の御霊があなたをうながしている声であります。私も何年も前に、イエス・キリスト様の前にこのような集会で出てまいりましたけれども、一番最後に立ち上がって出て行ったのです。けれども私はそのことによって私の生涯が大きく変えられたことを覚えております。どうぞ今晚まだ観覧席に座っている方々の中で、そのような細いみ声を聞いたならば、どうぞ立ち上がって今下りて来て下さい」

続々と決断者が下りて生きます。私は洗礼を受けていましたし、ためらっていましたが、先生の最後のこの勧めを聞いて、グラウンドの下りる決心をしました。

グラウンドに降りた人が1000人ぐらいいたでしょうか、その人たちに向けて、ビリー・グラハム先生から特別のメッセージがありました。それは、エンカウンター第6号に書きました次の5つの勧めでした。

毎日聖書を読むこと。

聖句を覚えること。

毎日祈ること。

教会に通い洗礼を受けること。

信仰を証しする人になること。

このメッセージの後、降りた決断者の一人一人にカウンセラーの人がついて質問に答えてくれました。私に話しかけてくださった方は、キリスト新聞社の中村さんと言う方でした。私は、洗礼を受けているが、信仰が中だるみになっていることを話したら、イエスキリストの十字架のあがないの話をしてくださったように覚えています。

そのとき、ビリー・グラハム先生の教えの要点を印刷した聖書、聖句を覚えるためのカードがついた冊子などをいただきました。そのカードに、コリント第一の手紙10章13節「あなた方の会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなた方を耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に、逃れる道も備えてくださるのである」というカードが含まれていました。このカードは、その後何度も仕事で困難なことに出会ったとき復唱し、今もお守りのようにして、大事に持ち歩いています。

私は、早速翌日からその教えを実行するために、手帳に日程表を作り、聖書一章、聖句暗記、祈りの欄を作って、×で毎日の実行状況を記録するようにしました。この星取り表は、表がなくても実行できるようになるまで1年以上続けました。聖句は、小さいカードを作って、聖書の中から大切な聖句を書いて、毎日覚えるようにして、100枚以上は覚えしました。

1980年の伝道集会は、10月25日、10月26日も、憑かれたように出かけました。最終日の10月26日は日曜日でしたので、午後3時から開かれましたが、後樂園球場が満員の5万人ぐらいの聴衆でした。このときのメッセージは、キリストの再臨についてでありました。

このときの印象を信仰の友人の米倉安雄さんに次のように書いて送った手紙の下書きが出てまいりました。

「今日26日の最終日は、あの後樂園球場が外野席も含めて満員でした。ビリー・グラハムの説教後の信仰決断の表明の勧めに応じて、グラウンドいっぱい、5000人から1万人の人が降りて決断したのは、イエス・キリストがガリラヤ湖畔で5000人に食べ物を与えた奇跡の再現を見るような感じでした。また、ビリー・グラハムは、これからアメリカ、ポーランド、ルーマニア、イギリスを伝道してまわるようですが、パウロの伝道のように思いました。その説教の力強さは、パウロのようであります。

私が感銘を受けましたのは、ビリー・グラハムの勧めが非常に聖書的であり、単純で明快だからです。彼の信仰決断者に対する勧めは、

毎日聖書を読むこと。

毎日祈ること。

聖書の箇所を暗誦すること。

教会に通うこと。洗礼を受けること。信徒と交わること。

家庭で、職場で、信仰を証しすること。

私も、聖書を読まないクリスチャンであり、最近特に惰性におちいつていることを深く反省し、これらのビリー・グラハム先生の勧めに従おうと決意しました。

電車のつり広告で見て、冷やかし半分に出かけたのですが、その迫力と内容に驚嘆し、一気にビリー・グラハム信者になってしまいました。20世紀最大の伝道者であるはずです。」

そして、ビリー・グラハム先生の教えを星取表まで作ってよく

実行したものだと思いますが、不思議なのは、その翌年京都府庁に転勤になり、最初の一年は元気でどんどん仕事をしたのですが、信仰を頂いたのに、2年目から担当した大きな仕事がだんだん重荷になり、とうとう体調をすっかり崩してしまいました。

その後1994年の1月13日から16日の4日間、新しく建て替えられた東京ドームでビリー・グラハム先生のクルーセードが開催され、この時も出かけました。確か最終日の1月16日は、佐藤レンさん、佐藤昭夫さんを誘って、一緒に行きました。その帰りに、レンさんが、「ビリー・グラハム先生が、「今あなたにイエス・キリストが入られた」と言ったとき、イエス様が私に入られたと思った」と言われ、何と素直に信仰を受け入れる方だろうと思ったことを覚えています。

今は、すっかり元気になって、ビリー・グラハム先生の教えの中で、毎日聖書を読むことと、毎日祈ることを続けています。昔覚えた聖句は、今でも思い出して、力になっています。

あのクルーセードの日に、後楽園球場内や席の最上段のベンチからグラウンドの下りて、親しくビリー・グラハム先生の教えを聞いたことにより、毎日聖書を読むこと、毎日祈ることと言う良い習慣をつけていただいたことになり、迷った末最後に下りていったあの決断が、私にとって、非常に重要な決断になりました。

ビリー・グラハム先生の「証をする人となれ」という勧めは、あのときから22年たって、今このエンカウンターのような形で現れてきているように思います。

1980年のクルーセードのとき頂いたいろいろなパンフレットや、大会の後発行された、テープや記録の本などを大切にっており、それらを引用しながら、22年前の私の回心を書いてみました。